

## 紹介

アーサー・F・ライト著  
布目潮風・中川努訳

### 『隋代史』

近年、欧米学者によるアジア史研究書の日訳が盛んに行われている。大体は、日本史関係であるが、たまに中国史関係の書物も見える。布目潮風、中川努の両氏によって翻訳され、昨 year 上梓された、故アサ・ライト遺著の『隋代史』もその一つである。

一九七六年六十三歳で死去した、元エール大学教授の故アサ・ライト氏は、生前研究、教学、組織の諸方面において欧米における中国史学の昌達に大きな貢献をした。氏は、幅広い研究活動を行い、数多い論著を残したが、そのうち『中国史における仏教』などがすでに日訳され、日本にもその名が知られている。こういう氏が生前深い関心を持っていたのが隋である。そして何編かの論文を発表したが、ライフ・ワークとして企劃した隋一代の通史は、氏の急逝のため遂に完成を見なかったのである。幸

い氏の高足のミズーリ大学助教授のロバート・ソマズ氏が遺稿を整理したうえ自ら結論を加え、一九七八年アメリカの大手出版社アルフレット・A・ノブが上梓したのが本書である。

従来、隋は、南北朝の最終的段階、あるいは、隋唐という言葉が示す通り唐の前奏にすぎない存在として理解されて来た。従って、隋を独立した単位として検討し、その功過を評価しようとする努力は、余りにも見られなかったのである。数多い南北朝あるいは、隋唐の通史のなかで隋一代の通史だけが今までなかった現実がこのことをよく語ってくれる。

こういう学界の現況から見れば、本書の出現は、実に劃期的なことであり、一応その価値を認めなければならぬ。とすれば、ライト氏は、本書でどのような従来とは違った解釈を試みているのか。氏の隋史理解の根本となるのは、何であろうか。本書の冒頭で氏は、次のように語る。

いかなる文明史においても、比較的安定した時期と比較的静止した時期が出現する。また急速な転換期と重大な革新期が史料を通じて散見される。この

ような時期には、旧制度が排除され、古くて手に負えなくなった問題についての新たな解決法が発見され、実施に移される。歴史家はその時代の文明の記録全体にざっと目をとすと、このような時代こそ、その文明の型をはっきりさせる上に決定的な力を持ったのだと痛感させられる。中国文明史家にとつて、五八一年から六一七年にいたる隋代はそのような時代の一つである。

(一頁)

即ち氏は、隋を分裂と沈滞の時期に終止符を打ち、統一を成し遂げたうえ、ダイナミズムに富む文化を創り出した王朝として評価している。氏は、隋を南北朝の一部分とも思わなければ単なる唐への前奏とも見えない。氏にとつて隋は、中国史における偉大な創造的な王朝である。それだけではない。氏は、南北朝がすでに中国をいくつかのそれぞれ違う国に分裂させる可能性を孕んでいたと前提し、中国がそれ以後千年も以上、統一を維持し得た力の源こそ隋であるのだと、所論を進めている。

こういう見方が正しいかどうか、なお隋が果して氏のいう通りの存在であったかは、

いずれ論難の余地があるだろう。が、本稿では、より範圍を狭くして本書の内容が氏の論旨を十分支えているかの問題を中心にふれて見たいと思う。

まず章構成より見て見よう。本書は、合わせて十章になっている。各章には、それぞれ「隋の挑戦」、「六世紀の中国」、「楊堅の興起」、「再統一」、「文化的指導権の復活」、「南朝征服」、「第二代皇帝—煬帝」、「隋朝の極盛期」、「軍事的惨敗と政治的崩壊」、「隋の遺産」という名が付けられている。ソマーズ氏による第十章を除いてはすべてライト氏の遺稿に基づいたものである。第一章では、隋の性格及び隋の功過に対する氏の理解がひれきされ、第二章では、隋が出現したときの環境やそこまでの歴史の経過が略述されている。その他の諸章は、大体年代順に従って隋の興亡を語る。

本書で一番優れた章を選ぶならば、私見では、第五章ではないかと思う。これは、また本書で一番重要な章でもある。ライト氏は、章の冒頭で次のようにいっている。

中華帝国の歴史を通じて、万人が遊奉し享有する普遍的な文化規範によって支えられるときにだけ、政治支配が成

功し、それが継続できるということはい明の理である。(一三五頁)

氏の歴史観の片鱗が見られ、また史家としての氏の面貌をうかがうことのできる言葉である。なおこの言葉によって隋に対する氏の高い評価の底には、「文化的指導権」(cultural hegemony)の再確立というものがあることがわかる。

ライト氏は、隋の行った種々の政策を「文化的指導権の復活」の枠のなかで取り上げ、理解しようとする。具体的には、律令の制定、教育・選挙・文体の改革、国家の指導理念としての宗教の利用を指摘している。氏によるとこれら諸政策は、すべてが「最高の儀式精通家」、「道徳律授与者」としての君主の威信を高め、統一王朝の基盤を鞏固にするためであった。これら諸政策の成功によってこそ隋は、名実相符な統一を成し遂げ、新しい時代を導くことができた、氏は論ずる。

社会や制度を論ずるときいけば文明史的、精神的のアプローチを取るとは、日本でも欧米でも、今は、ほぼタブー視されている。しかし社会にしろ制度にしろ、人間の創り出したものである以上は、精神的要素をも

軽視してはいけない。ある時代には、その時代を指導する精神があり、ある集団には、その集団を支配する価値観があると思うからである。

こういう観点から見るとライト氏の立った立場にも一理がある。新しい精神が新しいエネルギーの源になり、新しい秩序を造り出した例は、洋の東西を問わず、よくある。問題は、隋の精神がどこまで新しい精神であったかということである。

ライト氏は、隋の行った諸政策がまるで隋で始めてできたように論じている。しかし、律令の制定にしろその他の政策にしろ、北朝だけに限ってもいくらでも先例がある。統一への意志が隋になっていきなり現われたのでもなければ、統一への作業も同様ではない。

ライト氏が南北朝における歴史の展開を理解することが隋を正しく評価するのに持つ重要性を全く無視したわけではない。第二章こそそういう目的のために書かれたものである。しかしそこで表された氏の南北朝史の理解は、現在の研究水準から見れば、非常に皮相的なものであって、たまたま史実より遙かに離れた記述さえ見える。だいい

ち氏は、後漢末以降隋に至るまで何とも刮目すべき変化がなかったという態度を取っている。中国社会が四百年も超える間に何の変化も見せなかったとすれば、それは、停滞史観にはかならぬ。

いったいどうしてこういう結果になったのか。氏の如くすべての歴史の段階を「停滞期」と「革新期」とに分けて考える場合、むしろ当然なことも知れない。しかし、一方、本書の参考文献書目―日訳では省略された―を見ると氏が、中国、または、日本でなされた、南北朝史の各方面にわたる優れた研究の成果を全くもたないほど参考しなかつたことがわかる。中文、または、日文の文献に水準以上の教養と知識を持っていた氏がこれら研究の存在を知らなかったとは思えない。とすれば、氏は、一顧の価値もないものとして一蹴したのであるか。著者がすでに故人になった今、答える得られない疑問である。

本書に対する私の二番目の不満は、人物に置いた比重が大きすぎるということである。歴史を動かす力が人にあるか、それとも違うものにあるのか、という問題は、それぞれ歴史を見る目によって見解が異なる

だろう。最近、人が忌避され、環境や構造に専ら重点を置くのが一般的傾向らしいが、そうなると、決定論に陥ってしまう恐れが十分ある。どちらかといえば、史学における「人間の復活」が切実であるように思われる。しかし、人間を復権させるののだとして直ちに人物本位史観に向って行くのも望ましくはない。人間の思考や行動は、知らず知らずのうちに、自然・人工の環境の影響を受けるものであるからである。人間と環境との複雑で且つ微妙な関係を究明することこそ史学の本領ではないだろうか。

隋の文帝や煬帝、そしてその側近の重臣たちの性格描写は、確かに本書の優れた一面である。史料のあらゆるところから資料を集めたうえで行なわれた綿密な分析は、ライト氏の鋭利な眼目が加えられ、隋という時代をいっそう生々しく親近感のあるものとしてくれる。とはいえ、すべての成敗をこれら人物の性格や行為のせいとすることは、正しいと思わない。それは、少なくとも、旧来の人物本位史観への後退にすぎない。

ライト氏の叙述には、また人物を時代の一所産として把握しようとする努力が足り

ない。例えば文帝であるが、文帝に似た君主が北朝でいなかったわけではない。偉大な統一者の面影は、北魏の孝文帝にも北周の武帝にもすで見える。文帝に対する評価は、これら君主との比較のうえで行われるべきではあるまいか。

六世紀における中国の再統一とそれに伴う第二中華帝国の成立は、中国史の一大事変である。統一への過程を究明しようとする作業が数多い研究者の手によって行われて来たが、今のところわれらの理解は、まだ十分とはいえない。その原因は、恐らく今までの研究に細分化の傾向が支配的であって、時代の全体像を描こうとする努力が乏しかったせいではないかと思われる。

本書は、その発想から見れば、こういう不均衡を是正し、中国の再統一に対するわれらの理解をなお深めてくれる素質を持っていた。ライト氏自身やはり同じことを期待したのではないだろうか。にもかかわらず結果的にそういう期待に十分応じるこゝろがでなかつたのである。ライト氏の時代認識や方法論は、極言すれば、旧態依然なるもので、その結果できた内容は、現段階の研究水準より一步後退といつてかまわ

ない。まことに残念なことである。

最後に翻訳について少しふれよう。わかりやすく原文に忠実な翻訳だと思ふ。また粗末で簡略であった原注の代りに詳しい考証を加えた訳注を注いだのも非常に役に立つ。

(A5版 二八四頁 一九八二年一月  
法律文化社 三九〇〇円)  
(ジョン・リ 京都大学人文科学研究所外国人研修員)

### 受贈 図書

(一九八二年二月九日～五月一日)

日本民俗学(成城大学日本民俗学会)

一三八

日留山人著 建国の日は正しかった(タム

ラガーデン)

神道学(出雲大社神道学会) 一一二

立正大学文学部論叢 七二

日本学士院紀要(日本学士院) 三六一三、

三七一一、三七一二

岐阜史学(岐阜大学教育学部岐阜史学会)

七五

東洋学文獻類目(京都大学人文科学研究所)

一九七九年度

川内古代史論集(東北大学文学部古代史研

究会) 二

文理論集(西南学院大学) 二二二二

民族研究(北京民族研究編纂部) 一九

八二年一

史泉(関西大学史学会) 五六

人文論叢(東京工業大学) 七

文学会志(山口大学) 三三

歴史教育論集(慶北大学校師範大学歴史

科) 二

論集(福島大学教育学部) 三三三

隼人文化(隼人文化研究会) 一〇

東京商船大学研究報告(東京商船大学)

三二

尋源(大谷大学国史研究会) 三三

経済論究(九州大学大学院経済学会)

五三

学園史研究(梅花学園学園史研究会) 二

産業社会論集(立命館大学産業社会学会)

三〇、三一

広島大学文学部紀要(広島大学文学部)

四一

広島大学文学部紀要 特輯号(広島大学文

学部) 一、二、三

紀要論文総覧 二二巻～四〇巻(広島大学

文学部)

歴史学報(国立台湾師範大学歴史研究所)

九

隋唐仏教宗派研究(国立台湾師範大学歴史

研究所) 専刊(六) 顔尚文著

Korea Today(朝鮮社会科学院) 一九八

二年一

西洋史学報(広島大学西洋史学研究会)

復刊八

研究紀要(尾道短期大学) 三一—一

人文論叢(福岡大学研究所) 一三一—四

鹿児島経大論集(鹿児島経済大学学会)

二二—四

岡崎市史研究(岡崎市史編纂委員会) 四

国史談話会雑誌(東北大学文学部国史談話

会) 二二三

社会科学(朝鮮社会科学院) 一九八一年

一六

坂野潤治著 大正政変(ミネルヴラ書房)

有坂隆道著 日本洋学史研究 M(創元

社)

山形大学史学論集 二

Советская Этнография 1983-1

人文科学論集(信州大学文学部) 一六

札幌大学教養部・女子短期大学部紀要(札

幌大学) 一八、一九